

# 紅、花 (十六) 黙示録

琉 紅

(十六) 黙示録

大君の口元が笑った。

「本部平原、もったいぶるのも程々にな。危うく、こちらがやられるところじゃった」

今帰仁城の本丸前の城壁が閉じられ、そこから上を占領され焼かれている。

虎の台車の横、槍の陣形の先に位置していた美久は刀を仕舞い、右手を下げて進行を止めた。真後ろに位置する、今帰仁城の本丸を仰ぎ見た。

赤く燃え盛っている。

黒い煙が城を覆い隠すのも、時間の問題だった。

(やはり)

美久はしてやられた、という表情へ。

城の本丸が赤く燃え、北山軍の兵士等は動揺し始めた。

炎が殆どどの兵の目に映り、恐怖を与えていた。

それは連れて来た家族、そこにいた守備兵が全て捕まり、捕虜、人質になったのではないかと、思わせた。

大君の打った手は、美久の虎の策以上の効果があったのである。

目に涙を浮かべた老將兵が近寄る。

「もう駄目です。難航不落の我が城、その本丸が占拠されました。どうなさいますか。南山もほぼ壊滅ときいております」

賢龍は馬上から、

「最後の戦略をここで下すのだ。中山の本陣はもう目の前だ」

美久は頷く。彼女の頭脳はフル回転する。目は血走り、彼女の鼓動と血流は限界寸前となった。

僅かな時間であるが、北山の兵士らには永遠に感じ、美久の言動に注目した。

「弓を打てる兵をここへ呼んでください」

「こちらの兵はそんなにいないぞ」

「ええ、優れた者を数人でいいので、ここへ」

賢龍は兵等にすぐに集まるよう命令を出した。

「美久、どのような策なのだ」

「説明している時間がありません。私に任せてください」

そうこうしている間に、陣営から五人の兵が、

虎の戦車の後ろへ集まってきた。

「いいですか、私の示す方向に弓を引いておくのです。この作戦は、あなた方の腕にかかっています。頼みますよ」

といいながら、美久は右手を敵陣の天幕へ向ける。

「全軍、静かに音を立てずに！」

急に静かになり、馬の声、虎の声のみになった。

左右から風が吹く。耳を澄まし全ての音を集めた。時折、混乱した中山軍から流れ矢が飛んでく

る。それが楯、木板に突き刺さる音がする。美久の前髪が揺れ、風が前方からとなった。

微妙に指先が調整されていく。

~~~~~

「バカもんが。獣けものがいるだと」

「ええ、猫の化身です。私は見ました」

「何を乱しておる。ただの南蛮の動物じゃ」

「間違いありません。恐ろしい唸り声があるので」

「お前を取り立てたのは間違いだったのかのう」

「もう、どうでもよい。見よ、あの燃え盛る城を」

「ああ、確かに、我々の勝利ですね」

~~~~~

風に乗った最後の声を確認して、微かに角度を上げた。

「この方角、今です！」

一斉に弓矢が射られた。風を切っていく羽の音が重なる。

光る矢の行き先は鳥たちしか知らない。

『尚巴志等は燃え盛る城を見ようと、今、間違はなく天幕から外に出た』

と、美久は確信した。

急に森から鳥達が飛び立ち、矢の流れに沿った。季節風に乗って大地から放たれた一群の弓矢を、同じ仲間だと勘違いしたのである。

先頭の一本の矢が白色の鳥の腹部に刺さった。その矢は、ばたつくその鳥を引き連れたまま、本陣へと向かっていく。

大君に、ばたばたと目立ち、群から飛び出たそ

の鳥が見えた。

咄嗟に、大君は尚巴志の前にあった台を壁にして守りの体制を整えた。そこに続けざまに突き刺さる四本の矢。五本目の遅れた矢には、羽をばたつかせたままの鳥が付随し、鳴き声を発している。風下にて耳を澄ます美久には、戸板に刺さる音が連続で聞こえた。続いて鳥の羽音と痛みを伝える鳴き声。それは嘗て、洞窟の授業の最後で、狙い迫る蛇から逃がした小鳥の声に似ていた。

「あーっ」

美久は嘆き、足元がふらついた。

それに対して、大君の目は血走り、矢が刺さったまま息絶えようとすする鳥の目を凝視し、身震いしながら歓喜の声を発した。

「風神は、鬼人と化した美久を見放した。北山はこれまでじゃ。私が全軍を率いて総攻撃を開始する！ あれを使いたくはなかったが、近づいて、

まずはあの獸けものを討て」

今帰仁城の本丸は本部平原の裏切りで焼け落ち、美久達には乱雑な弓矢の雨が降ってきた。虎の居る檻に矢先の鉄がぶつかり合う音が生じる。すぐに矢をよける楯、木板を持った兵が前に並ぶが、それ以上に中山の弓の兵が群れで押し寄せ

る。楯としてゐる物に、数えきれないほどの矢が刺さり砕け散った。

その攻撃に耐えきれず、虎を守っていた兵等は後ずさりしながら討たれた。

その隙に一本の矢が隙間から入り込み、守り神であった虎の腹部に突き刺さった。苦しみの声をあげて、檻の中で暴れた。

そそくさと近寄ってくる敵の兵士が一人いた。右手に持った煙を発した筒を虎に向ける。北山の兵は、刀も弓矢も持たない傷ついた敵兵だと思ひ、

注意を向けない。

やがて、筒先からは金属のはじける轟音とともに火花が散り、中から放出された何かが、虎のいる檻の鉄の柱に当たった。

金属同士がぶつかる重音が発し、檻全体が揺れ動いた。拳ほどの黒い鉄の玉が転がり落ちる。

更に、後ろから追従して現れた兵の手にも筒があった。同様に、虎に向けられる。

今度、発せられた鉄の玉は檻の柱に接した後、炸裂した。中の虎の体全体に破片や火花が被さる。その衝撃で反対側に押し倒された。

それを機に、馬に乗った敵の兵士らが前方から進軍してくる。北山軍の先頭、猛獸の獲物を食おうとする声が無く、中山騎兵隊の馬は恐れを持たないのだ。

「撤退！ 城壁内に戻れ」  
賢龍王は声を上げた。

虎は腹部に矢を受け、体全体がやけどを負ったかのように茶色く変色し、最後の一声を発して息絶えた。

「戻れ、建て直しだ！」

呆然とし、放心状態の美久の側で、賢龍が声を荒げる。

力なく垂れ下がった美久の右手の長刀を取り空に掲げた。

美久も他の将兵に補助されて、賢龍の馬に乗せられた。

北山軍は第一の城壁内に戻った。それから上は、謀反を起こした本部平原の兵が占拠し、本丸の屋敷は燃え続けている。

老兵が美久に近寄り、

「美久様、外を、外をご覧ください」

中山連合軍の全兵士が、弓矢を引き、槍を向け、刀をかざしていた。それぞれの兵士らは各城の旗

の下に集合し整理しては、掛け声をあげた。

その後方にも兵の塊が見える。その声に会わせるように、前方部隊では大太鼓が打ち鳴らされている。本島中部、北部から北山を除く全ての城の旗が、風でなびいていた。

後方の今帰仁城の本丸には、本部平原の軍が矢を射る準備をしている。さらには、虎に向け撃たれた筒状の武器を持った兵が、十人程整列した。筒の後方に火をつけ、城壁に向けている。

その一つが火を噴き、吐き出された鉄球は城石にぶつかり飛び散った。その振動する城壁の後ろに隠れ、上下にも挟まれた北山軍は震えだして、美久に指示を求めている。

もう戦いたくない、という気持ちが生じていた。全ての兵に生じていた。

中山の本陣方向をみる美久。

大君も同様に彼女を見ていた。さらに大君の後

方には尚巴志が座している。

（美久よ、これまでじゃ）

大君は腕を組んで今帰仁城を仰ぎ見た。

美久は自分の花のかんざしに触れ、それを取り外した。

彼女を凝視していた一人の伝達兵がいた。彼は  
急ぎ、兵の群れに入って立ち去って行く。

その動きを確認した美久は賢龍に、

「この旗の整列、攻撃を中断した間、北山は琉球  
のすべてを敵に回して戦うのか……という意味」

つづく